

随想

ゲルマン娘と土佐



片木 淳
(高知県総務部長)

森鷗外の「舞姫」ではないが、先頃、私を慕ってはるばるドイツからゲルマン娘(独身)がやってきた。彼女は、実は私がドイツにいた頃三年間ドイツ語を習っていた先生であるが、常日頃「日本に来るのなら是非高知に寄ってくれ。東京は日本ではない。本当の日本が知りたいのなら絶対高知に来るべきだ。」とっておいたのを真に受けて、東京、京都を経て夜行フェリーでやってきたのである。

高知には一週間滞在し、その間ずっと拙宅に寓居した。和式トイレで、風呂にはシャワーもなく、おまけ

出掛けていたようだが、彼女の言によれば、ヨーロッパ人にとって海の間にまで緑の山が迫っている光景は、珍しいし非常に美しいと感じるのだそうである。その点では、家内が案内したリアス式海岸が太平洋に落ちる横浪半島が特に気に入っていたようである。「こんなに静かな、入江に面したすてきな浜辺には、人がまるでない。一方で、あの度をはずれた騒がしさの街のバチンコ屋は満員だ。私には日本人が全く理解できない。」というのが、静謐を受する森の民の末裔の感想である。

周知のとおり、ドイツ人はまた、Wandern(歩き回る)が好きである。ある夜、「今日は、桂浜から歩いて四十川まで行ってきた。」という。驚いて良く聞いてみると、どうやら太平洋に面した砂浜沿いに仁淀川河口まで行ってきたらしい。往復四時間以上は歩いた計算になる。「女が一人で危ないではないか。」というと、大いに笑って「私も小娘ではない。クレタ島でギリシャの男に襲われたこともあるが撃退した。」とのことであった。

東京では、「とてもこんなところで生きてはいけない。」と大変なショックを受けたのだそうである。「満

に量の生活で「腰が痛い、腰が痛い。」と悲鳴をあげていたが、結構本格的な日本式生活を楽しんでいたようである。

彼女は、デュッセルドルフ当時も食事に誘うと、日本レストランへ連れていってくれというほどの日本食党であったので、新鮮な土佐の魚には、大いに感激していた。ganj Anders(全然違う)というわけである。皿鉢料理に盛られた土佐のサシミは、豪快なアツギリで一切れが県外のサシミの二、四倍はある。私も、もとは県外人であるが、高知のサシミを食うようになってからは、東京に出張してもサシミが食べなくなって困っているぐらいだ。おまけに高知の酒は、日本一サラっとしていて辛口でうま味、翌日に残らない。飲みすぎるので、県が成人病対策として「上手に飲んで長生きしよう」キャンペーンをはらなければならない程である。

滞在中は、ちょうど県議会開会中で残念ながら満足に案内してやれなかったが、ひとりで高知市周辺を探索し、親切な高知県人に助けられて、日本語が全く出ない割には不自由はなかったようである。なかでも彼女のお気にいりは、桂浜と太平洋であった。何度も

員電車に詰め込まれた人々の顔は、こわばってしまって表情が消えている。馬車馬のように前方に視線を固定させたまま急ぎ足で歩く日本人を見て怖くなったぐらいだ。高知に来て本当によかった。それにしても、どうして東京集中でなければならないのか。地方分散にしてしまえばよいではないか。何故できないのか、私にはわからない。」というのが、「多極分散型国家 地方分権の国ドイツ」(ぎょうせい、拙著参照)から来た、人間の理性の力を信ずるゲルマン娘の結論であった。

一週間後、太陽と緑溢れる土佐を満喫して瀬戸大橋経由で帰る彼女を家内と一緒に駅まで見送った。「国民休暇県で売り出す理由がよくわかった。帰ったら、日本で一番いいところだと宣伝する。来年もまた是非来たい。」というのが別れのセリフである。